

さぶちゃん 奮戦記

62

菅原工務店創業物語

修業と学問と

高橋工務所は、古川市内の新築請け負いばかりでなく、仙台市方面でも請け負って大工を派遣していた。さぶちゃんは二年目の暮れから仙台ではたらいた。東北大学病院建設の窓枠や天井の張り込みなど木造部門を兄弟子と担当した。元請けは駅前大通り、突き当たり交差点角の吉田木工所。JA古川の事務所へいく手前であった。その経営者と高橋喜一社長が懇意にしており、「若い大工を振り向けてもらいたい」と頼まれ、さぶちゃんや兄弟子が仙台へ出張した。

仙台市も東京都と同じように焼夷弾を投下されて市街地はほとんど焼失した。戦後、第一に社会インフラが整備された。電車がはしり、東一番町を皮きりに碁盤の目のように商店街が整備された。

さぶちゃんが担当した東北大学病院はいの一番に復活したが、コンクリートビルの窓枠は、まだ木づくりだった。現在のサッシ窓は、

その後になる。

請け負いは昭和四十年暮れから翌年三月までつづいた。それから冬期間は住宅建設の受注がほとんどなく、仕事の注文があると仙台方面にも派遣した。

「仙台に宿泊まりでできる飯場が完成するまで古川―仙台をバス通勤させられました。車酔いがひどくて七北田で途中下車してゲロを吐いたこともありませう。亀岡（仙台）に飯場ができてからは楽になりました」

車酔いは現在も治らない。バスは苦手で、乗用車は自分が運転すると問題ないが乗せら

仙台で飯場生活を体験

れると車酔いする。ブランコも苦手という。

仙台勤務の修業時代は夜間残業がザラだった。午後八時すぎにパンと牛乳がでて、もちろん残業手当などなかった。

「仙台の大工さんは、ネクタイをして背広に皮のカバンを下げて出勤していました。カバンのなかには愛妻弁当がはいっていました。みんな電車で亀岡まできて、飯場にくるとロッカーで作業服に着替えていました。そして夕方、仕事が終わると『ごころうさん』といってロッカーで背広に着替えて帰る。別世界

ではたっている気分でした」

仙台では、大工職も一般のサラリーマンと変わりなく背広姿で通勤し、はたらくときは作業服に着替えた。現代の技術者、エンジニアということになる。さぶちゃんは、どこへいくにも伝統ある「大工は作業服」と思っていたが、考えさせられた。それでもジーンズにジャンパー、当時流行した帽子をかぶって亀岡の飯場で撮ってもらった写真がのこっている。

弟子入りして四年の歳月が流れていた。昭和四十三年春には、技術者を養成する専門学校

を卒業する。卒業証書と技術指導員（大工部門）の資格が得られた。それまでの大工見習いから指導者となる職工とみなされ、給料も一人前に支給されるようになる。

「わたしも普通の若者です。資格をもらえば同僚とおなじように考えて人生の岐路に立ち、悩みました。仲間から誘われもしました。それでも開拓にそだちましたから、人一倍忍耐がありました。恩師や師匠の高橋先生（社長）は恩情と人間味のある方で、四年以上もお世話になり、仲間といっ

東北大学病院（仙台市）の屋上で



しょになって簡単にやめるわけにはいきませぬ。その後、事情（後述）ができて止めることになりましたが、独立してからも先生の生前中は、家にかがっていろいろ教えてもらいました」

さぶちゃんは、高橋工務所へ新たに大工見習いとして弟子入りした新米の世話をしながら作業場（工場）二階の部屋に宿泊まりして、いっしょにはたらいた。

〈伊藤〉